2008.9.13

博物館 Dictionary No.163

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平常展示館2階11室の絵画について勉強してみよう。

草花図襖「伊年」印
京都国立博物館蔵

脳の科学によると、左脳が知識を、右脳が感覚をつかさどっているそうですが、皆さんは、絵の前に立ったとき、何を描いているのかを見ようとしていますか(左脳型)？それとも、どんなふうに描いているかを見ようとしていますか(右脳型)？

学校の勉強で左脳を使うことの方が多いせいか、右脳の方は、少しお休みがちになっているかもしれませんね。食材が同じでも、味つけが違えば全く別の料理になるのと同じように、同じものを描いても、どんなふうに描いているか(味つけ)で全く違う絵になります。絵の味を、目と心で感じ分けたいものです。

この絵では、どうでしょう。まず、何が描かれているのか。いろいろな草花が、4枚の襖に描かれています。右から順に、竹と蔦、薔薇(トゲがありますね)、野薊、秋海棠、芥子、山帰来、立葵、菫、鶏頭、葉鶏頭、蜀黍の12種類。

菫や山帰来、野薊、芥子は春の花。薔薇や立葵は夏の花。鶏頭や秋海棠は秋の花。現実には、これらの草花が同時に咲くことはありません。絵だからできるワザ。違う季節の草花を同時に見たい。それを実現しています。

では、どんなふうに描かれているのか。全面に金箔が押されていて、とても豪華な感じがします。その上に直接、絵の具が塗られています。色は赤と緑。けっして派手ではなく、落ちついていて、しっとりとした感じです。輪郭線はなく、絵の具が濃淡をつけながら薄く塗られ、薄いところでは、下から金がきらきらと輝いています。金地を透かすような素敵な描き方がされているんですね。

草花の配置と伸びる向きに注目してみましょう。ど真中は芥子の花。右端の竹から、左端の蜀黍まで、草花の根元は半円状にならび、それぞれの草花の茎が円の半径のようになって、中心にあたる芥子の方向に向かって伸びるよう

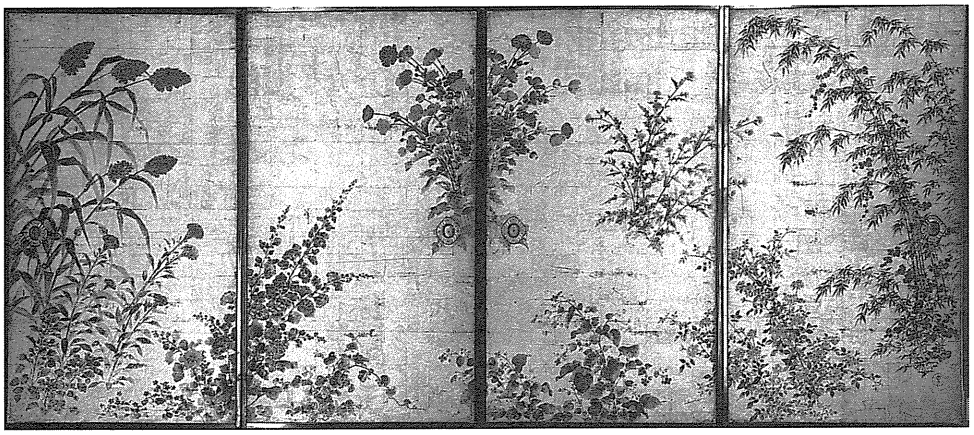


写真1　草花図襖「伊年印」 京都国立博物館蔵

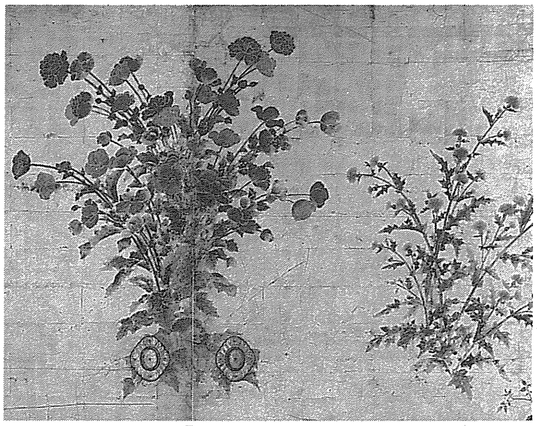


写真２　草花図襖「伊年印」（部分）　京都国立博物館蔵

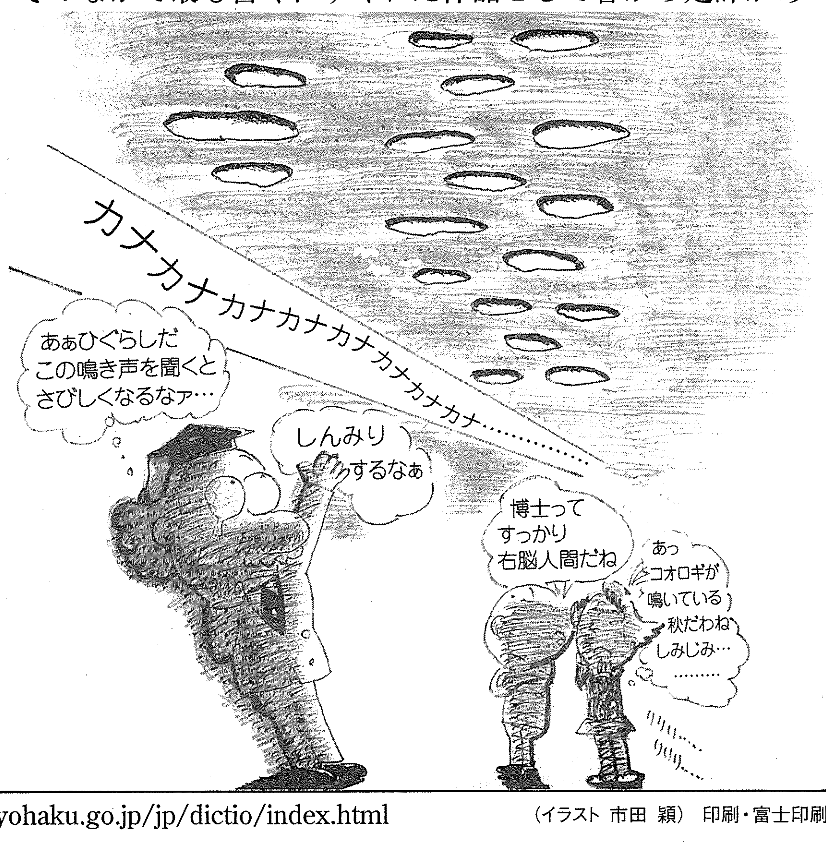
に描かれています。円環状の独特な構図をとっているんですね。芥子の右側に野薊を配して、絶妙なバランスをとっていることも見逃せません。地平線も地面も描かない金色一色の画面上、草花の根元の位置と茎の向きだけで表わしているのです。どうですか？ひとつひとつは水平にみえますが、全体としては、かなり高いところから野原を見下ろしているように見えてきませんか？

作者について詳しくは分りません。でも、俵屋宗達という絵師と関係の深い作品と考えられています。俵屋宗達は、桃山時代から江戸時代の初めに京都で活躍した絵師で、「風神・雷神図屏風」の作者として有名ですよね。

応仁の乱で荒廃した京都では、「町衆」という、裕福な商工業者たちが構成する自治組織が力をたくわえ、やがて、それまでの武家や公家に代わって、新たな文化の担い手となっていきます。

宗達も、その「町衆」のひとりでした。「俵屋」という屋号の「絵屋」の経営者で、自分も製作し、職人である弟子たちを指導していたようです。「絵屋」は、桃山時代から江戸初期にかけて登場した新しい職業で、色紙や短冊の下絵、扇絵、灯籠の絵、あるいは染織の描絵や下絵などを手がけ、製作した絵を店頭で販売したり、受注製作を行なったりしていました。

「俵屋」は、高級ブランドとして、当時たいへんな人気を集め、やがて、お寺や朝廷からも注文がくるようになります。その俵屋製とみられる金箔地に草花を描いた襖絵や屏風絵が何点かのこされています。そのなかで最も古く、すぐれた作品として昔から定評があるのがこの絵。宗達のすぐれた弟子のひとりによって描かれたとみられています。右端の下に、「伊年」と読めるハンコが捺されていますね。これは、俵屋ブランドのマークなのです。



右脳をフル回転させて、このおいしい絵を、じっくり味わってくださいね、心に栄養たっぷりの絵であること、保証付きですから。

（美術室　山下善也）

（イラスト 市田 穎）　印刷・富士印刷社